実で語らせるためのひらがな手書きのすすめ

◉

まず，声による言語の機能を，語り手と聞き手の関係，言語の形式や定型性などとも併せて整理することからはじめよう。言語には，次の三つの基本的な側面を見分けることができるだろう。ひとつは，(イ)情報伝達性，(ロ)行為遂行性，(ハ)演戯性，である。

これら言語の三側面を，文字との関係でみると，(イ)は文字に記されても機能は本質的に変わらないのに対し，(ロ)では，そのエネルギが失われてしまう。……

次に，文字の機能について，右にみた声の言語の特質とも対比させながら整理してみよう。

◉

(1)不変・持続性。

声による表現は，発し終えた瞬間に何の痕跡ものこさず消えてしまうのに引きかえ，文字は言語の主にして分節的特徴（表音されたは音節文字）や概念的（表意文字）を空間的に固定し，ある程度の程度の持続をもつことができる。その際，声による表現の特質である音質や音象徴性，韻律的特徴（音の高低，強弱）などは大部分，場合によってはまったく，同一のメッセージの反復参照の可能性やメッセージの空間的・時間的遠隔伝達持続性によって，同じ一のメッセージの反復参照をもつということである。

(2)発信・受信における脱同性。

文字に書く（発信），文字を読む（受信）行為は，声による伝達が，発信・受信ともに時間の中でしかなされえないのとは対照的に，まったく時間を離れて行なわれうる。つまり，文字で書きあるいは文字を読むことには，必要なだけ時間をかけて内容を考え，あるいは表現を推敲することができる。……

(3)知的，脱状況的伝達。

……一般に音のコミュニケーションが，言辺にあいても韻律的特徴など，概念化されて意味よりは情動的は伝達力をつよくもつ。伝達行為の状況依存性が大きく，現前する受信者を「巻き込む」ような形で伝達が行なわれるっとが多いのと対照的で。……

(4)情報伝達の効率の大きさ。

文字にるとしメッセージを用いる方が，音声のメッセージにくらべて，少なくとも量的には，情報の集積と参照に関しては効率がよいことはいうまでもない。また，人間は耳よりも目の方が格段に弁別能力が高いので，とくに漢字を用いた場合は，情報を担う視覚記号として，効率がきわめて大きい。これと対照的に，音声だけを用いた場合，日本語は音節数が少なく，同音異義の単音節語，二音節語が頻出する。その上，文字の意味優先で導入された漢語や外来概念の翻訳語も膨大な数にのぼるため，音声だけのコミュニケーションでは伝達が不十分になりがちで，漢字を媒介にしたいと日常会話でさえ十分に意味が伝わらなくっことが多いが，異言語からの文字を借用して漢字依存関係の，興味深い事例を提供する。

―――――――